

令和7年度

入善町立入善小学校

令和8年3月23日



# 学校だより

学校の教育目標 「じりつする子供の育成」



自ら学ぶ子 大切に作る子 やりぬく子

小学校教育研究会体育科研究推進校

## ビオトープのヘビ

校長 内山 真之

どの学年も「お楽しみ会」を企画、準備しています。マジックを披露したり、得意なことを発表したり、ダンスはもちろん、段ボールで「焼肉コーナー」も作っていました。私のような年齢になると、この学習、この活動の「本質」は何だろうと、ついつい考えてしまうのです。「ハサミ」の本質は何でしょうか？本質は「二つの刃を交差させて、対象を切り離す」という機能でしょう。金箔で飾られても、切れなければ、それは「ハサミの形をしたオブジェ」であり、ハサミの本質を失っています。

授業の「本質」を考えるきっかけになったのは、「学校にビオトープをつくろう」という先輩の授業でした。その先生の授業は、「一人でも、数人でもいいから、学校の作りたい場所に、自分たちでビオトープをつくる」という単元でした。この学級では、蝶をよぶ花壇を造り、数人で穴を掘って池を造り始めました。ドジョウやオタマジャクシを放し、水草も植え、ビオトープらしくなってきた頃に事件が起きました。一匹のアオダイショウが池に現れたのです。みんな大騒ぎ。「捕まえて、どこかに捨てて！」という声に、一人の男の子がヘビを捕獲し、なんと教室で飼育し始めました。「もともとヘビが棲んでいたところに、ぼくたちが池を造った。ヘビは悪くない」と言う。何度も話し合ううちに、「自分たちが造っているビオトープって何だろう？」と考え始めた。



ビオトープ（の本質）は、単に生物がいることではなく、そこに「食物連鎖（生態系）」が存在していることだと気付いた。この子たちは、ビオトープにヘビを放すことにしたのです。「ヘビもいます」という注意を促す看板も設置して。もし、ヘビに出会わなかったら、「池造り」という作業で終わったことでしょう。

できすぎた結末だと思ったら、この先生は、そこに（無毒の）ヘビが棲んでいることを知っており、子供たちがヘビに出会ってから、本気でビオトープのことを考えるだろうと予想して、授業を構想していたのです。

さて、自分たちで知恵を出し合い、手を動かして「お楽しみ会」を作り上げていきます。単なる遊びではなく、「自分のやりたいこと」と「相手のやりたいこと」の「あわい（間）」を調整しながら、譲ったり、説得したり、案を出したりすることで、集団の中での自立を支えます。先生に「何をするか」を決めてもらうのではなく、自分たちで合意形成して決めていくことが、学校教育の重要な役割です。

本校は、学校の教育目標「じりつする子供の育成」を目指して、教育活動に取り組んでまいりました。ご家庭、そして地域の皆様に、たくさんのご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

R5～R7は、内山が執筆させていただきました。最終号となります。ありがとうございました。

## 2月18日 6年生を送る会

6年生を送る会を開催しました。会場全体が笑顔に溢れていて、これまで学校の中心として活躍してくれた6年生への感謝の気持ちが伝わってきた会でした。5年生の企画・運営も素晴らしく、次の6年生になる心構えができたことでしょう。たてわり活動3年目、たてわり清掃を開始して2年目になり、6年生はとても身近な存在になっているようです。



## 2月25日 なわとび集会（8の字跳びチャレンジ）

「なわとび集会（8の字跳びチャレンジ）」でした。どの学年も前日や当日に「学級記録」を更新したので、一番伸び盛りの頃です。全員で跳ぶ学級、半分に分けて少人数で跳ぶ学級と、いろんなチームがありました。「目標回数」を達成できなかった教室もあるでしょうが、「学級力を高める」という学校の目的は、十分に達成しました。



## 3月16日 卒業証書授与式

素晴らしい日となりました。コロナ禍をたくましく乗り越え、成長した36名の卒業生が本校を巣立ちました。おめでとうございます。

